【03-A2-001】校内外の連携により、短期に問題の解決に至った事例（高校１年生Ｃ男）

リストカットをするC男への定期考査受験を目標にした支援事例

キーワード：他校職員との情報共有　自傷行為　定期考査受験　行動面への焦点化

この事例では、他校の養護教諭からの情報により、支援が必要と思われた生徒に対し、養護教諭がどのように校内連携を図り、どのように介入していったか、その経過に焦点を当ててまとめました。

問題の概要

ある日、他校のＡ養護教諭から連絡が入った。「うちの学校のＢ子が、友達に抱きかかえられながら、倒れそうに歩いていた。事情を聞いたところ、交際していたＢ子とＣ男とが別れ話をした後、Ｃ男が嘔吐やリストカットをするようになった。Ｂ子は、そのことを２人の共通の友達を通じて教えられたが、どうしていいか分からずに悩んでいることがわかった。」という趣旨の情報提供であった。

本校に入学して間もないＣ男は、それまで保健室に来室することもなかったため、養護教諭には、Ｃ男がどのような生徒か情報がほとんどなかった。Ａ養護教諭からは「内密に」ということで情報提供を受けたが、心因反応やリストカットが疑われ、本人にとって初めての定期試験が目前に迫っている中で、緊急な対応が求められる事例であった。

対応の概要

１　対応開始までの経過

Ａ養護教諭から電話を受けた直後、出席簿で欠席状況を確認すると、Ｃ男はその日は欠席していた。欠席を確認した後、職員室に在室していた学年長と、しばらくして職員室にもどってきた担任に状況を説明した。その後、担任が副担任等に連絡した旨報告を受けた。

Ａ養護教諭からは「内密に」との連絡だったので、養護教諭はじめ、その事実は誰も知らないこととして対応することにした。リストカットの危惧と、当日欠席しているという状況から、担任が家庭訪問をしたい旨を保護者に連絡した。しかし夜に仕事をしている保護者と時間が合わず、その日に家庭訪問することはできなかった。ただ、激しく嘔吐している状況は保護者から確認することができた。

翌日、翌々日もＣ男は欠席した。担任が出張のため働きかけることができず、４日間欠席した（月曜日から木曜日まで）。しかし、木曜日の電話連絡で、Ｃ男の病院受診を確認することができた。また、翌週から本人にとっては初めての定期試験が始まることから、「テスト直前となる明日金曜日は登校するように」と担任から指導した。その後、担任・学年長・養護教諭と話し合いをもち、指導の目標を「翌週からの試験を受けさせること」とした。また、明日、本人が登校したら、担任が保健室に本人を連れてくるということも打ち合わせた。

◆２　対応の概要と援助のポイント

第１段階：事実確認の時期

金曜日、Ｃ男が保健室に来た。Ａ養護教諭の学校に在籍するＣ男の姉も、リストカット経験者であるとの情報が入ったので、Ｃ男もリストカットには抵抗がないことは予測された。しかし、Ａ養護教諭の情報からは、Ｃ男が友人に「手首を切ったとＢ子に言ってくれ」と言ったという情報しかなかったため、Ｃ男が本当にリストカットをしたのか確認をすることを第一の目標とした。

そこで、Ｃ男の左側に立ち、問診表を書かせながら、「脈拍を測らせて」と言って本人に左手首を出させた。Ｃ男は何気なく左手首を出したが、リストカットの跡が見えた瞬間、さっと左手首を学生服の袖の中に隠した。

第２段階：リレーション形成の時期

Ａ養護教諭の話によると、失恋のショックから、心因性の嘔吐が始まったのではないか

と推測された。しかし、Ａ養護教諭から「連絡があったことは本人に分からないようにしてほしい」との申し出があったので、原因について本人が言い出さない限り触れることができなかった。そこで、Ｃ男とのリレーション形成を目標として、原因には触れず、「何か悲しいことがあったんだね？」と言うだけにとどめた。そして、「手首は重要な神経や血管が走っているから、手首を切ることにより、手指が動かなくなることもあること、命を落とす可能性もあること、手首も自分の体の一部であるから、大切にしなければならないこと」などを話した。

第２段階：リレーション形成の時期

担任等との申し合わせから、翌週からの定期試験を受けさせることを支援の目標としていた。そこでＣ男に、週明けからの定期試験を受けるということを意識させ、「感情のコントロールはできないけれど、行動はコントロールできるんだよ」「何があったのかは分からないし、気持ちはすぐには変わらないけれど、行動していることによって気持ちが変わることがあるから、できることからやってみよう」と話した。また、各教科担任に試験範囲とテストのポイントを聞きに行くように促し、職員室に向かわせた。各教科担任には事前に状況を説明し、Ｃ男が聞きに行った時は丁寧に対応してくれるように依頼しておいたので、Ｃ男は週明けのテストの範囲とポイントを聞くと共に、各教科担任から温かい言葉をかけてもらうことができた。

終　結

テスト初日の月曜日、担任が出張だったので、本人の様子を聞くことができなかった。ＳＨＲ終了後、生徒の動向黒板で欠席状況を確認したところ、動向黒板の欠席が「０」だったので、本人が登校していることが分かった。状況は心配ではあったが、Ｃ男が保健室に来室しなかったので、あえて呼び出すことなく試験終了を待った。試験終了後、昇降口で待ち、友人と話をしているＣ男を見つけ、「試験、最後までやれた？」と聞いた。Ｃ男は「うん。」とうなずいたので、それ以上は聞かず、その場を後にした。その後、養護教諭から担任に、携帯メールでＣ男が教室で試験を最後まで受けられたことを報告した。テスト２日目も担任は出張だったので、同様にＣ男が登校し教室で試験を受けたことを報告した。結局、Ｃ男は３日間の試験のすべてを教室で受験することができた。

実践のポイント

生徒の友人関係は、その学校内だけではないことから、他校の養護教諭と情報のやり取りができる人間関係を築いていたこと。ネットワークを生かすことが重要。

再登校にあたり、学習（今回の場合は定期試験）に対する不安を軽減できたこと。学習支援は重要な要素。

養護教諭と担任・学年長・教科担任などとの連携がうまくとれ、Ｃ男が再登校する前に当面の支援の目標の確認と支援体制を取ることができたこと。素早い情報の共有と、支援体制づくりが大切。

本人にもコントロールできない感情面ではなく、コントロール可能な行動面に焦点をあてる。「とりあえずできることをさせる（行動化させる）」ことによって、感情の安定を図ることができたこと。行動化→感情の安定がねらい。

「養護教諭は身体症状として現れている現象に対応し、それを癒すことによって結果的に心を癒すことができる」という、養護教諭の行う健康相談活動の特徴を生かすことができたこと。身体症状からのアプローチが有効。